

令和4年度 新潟県立阿賀黎明高等学校 第2回 学校運営協議会 議事録

1 日時

令和4年10月6日（木）13時30分～15時30分

2 会場

県立阿賀黎明高等学校 多目的ホール

3 参加者

委員7人（欠席者なし）

県教育委員会1人

（オブザーバー参加）

- 阿賀黎明高校魅力化プロジェクト関係者3人
- 阿賀黎明探究パートナーズ関係者5人
- 阿賀黎明高等学校教職員4人

計20人

4 次第及び発言の概要

(1) 開会

ア 会長挨拶（清野会長）

イ 校長挨拶（伊藤校長）

本日はご多忙の中、第2回学校運営協議会にご参加をいただき誠にありがとうございます。年3回実施いたしますこの運営協議会の本日は第2回目ということで、本校の運営や活動の中間報告ということで進捗状況を報告させていただきますが、また忌憚のないご意見をいただき後半の運営や活動へ活かしていければと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、今年度も半ばを過ぎましたが、おかげさまで地域と連携した様々な活動が順調に進んでおります。こうした今があるのも、平成28年度、本校が県教育委員会から「オンリーワンスクール新潟未来プロジェクト事業」の指定を受け、当時の阿賀黎明中学校の1年から阿賀黎明高校3年までの6学年が一斉にそれぞれ地域と連携した取組をはじめ、多様な地域連携が進み、そして同じ年に阿賀町の「阿賀黎明高校魅力化プロジェクト」がはじまり、学校、町、地域が一体となった取組の積み重ねがあるからこそ感じております。

そして、本校の地域連携の特徴は活動が単発ではなく継続性があり、さらに連携を広げていくような活動であるということです。例えば、福祉体験だと福祉関係の方々や各地域の高齢者のサロンの代表者をお招きし、福祉活動を学び、各地域のサロンへ出向いての活動について代表者を交えて計画を練り、そして、各グループでそれぞれの地域のサロンへ出向き、交流の輪を広げていったり。また、防災学について関係者をお招きし、学び、学んだことをこんどは小学校へ出向いて小学生へ還元していくというように横にも縦にも広がる活動を取り組んでいます。小学校やあ

るいは中学校との連携は、阿賀町が取り組んでいます阿賀町15年教育にもつながって行くものであります。

まだまだ、発展途上の取組であり、課題もあり、まだ気がついていない課題もあるのではないかと考えております。

本日、またいろいろご助言をいただきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

(2) 状況報告に係る質疑・応答

ア 令和5年度募集学級及び生徒募集（事務局）

(清野会長)

県知事が高校の改編について言及したが、その流れは現在どうなっているのか。高校の存続は保証されたものなのか。再編の可能性はあるのか。

(齋藤指導主事)

将来構想を再検討する必要に迫られている。高校の再編については、地域の方の意見を丁寧に聞くことが大切というのが現知事の考え方である。再編の可能性についてはこの場で何とも申し上げられないが、地元の方の意見を聞き、小規模校としての取り組みも踏まえて丁寧に議論していかなければならないと考えている

(清野会長)

地域の意見を聞いて丁寧に議論していく姿勢を大切に進めていってほしい。

(猪俣委員)

応募状況は、県内、県外どのような感じか。

(西田地域学校協働推進委員)

基本的には県外である。新潟も数名いる。

イ 授業における地域との連携（西田地域学校協働推進委員）

(齋藤指導主事)

地域探究コースを設置し、地域と連携した活動を充実させていくという点に関して、9月からという部分があるが、春夏の状況はいかがか。

(事務局)

準備期間のため、調べ学習を中心に行っていた。

(遠藤委員)

春夏は調べ学習ということだが、約半分の生徒は町外から来ており、できれば阿賀町の基本的な事柄を扱う授業を実施した方がいいのではないかと考えている。自然や歴史等について地域の人から学ぶ時間や、あがまちゼミの最初に入門編を設ける等してはいかがか。阿賀町内の生徒もどれだけ知っているか分からない。できれば、取り入れていただきたい。

(西田地域学校協働推進委員)

2学年の早い段階で企画・実践するサイクルを何回回せるかが探究の力をつけるポイントと考えている。1年の夏休みに地元の何かに参加する、振り返るなどの自主活動のようなものを1学期のうちにできると良いと感じている

(伊藤校長)

1年の総合的な探究の時間が週1時間。進学に関する活動も入るため、このような形になっている。夏に何か取り組んだ方が良いという貴重な意見をいただいた。来年度以降の参考としたい。

ウ 高等学校に期待される社会的役割等（スクール・ミッション）及び阿賀津川中学校との連携について（伊藤校長）

(伊藤校長)

英語教員が中学校に出向いているが、負担が大きく、授業数を減らしているところ。教科学習ではなく、高校の地域探究と中学校の阿賀学等、教科学習ではなく学校の特色にあった連携を検討していきたい。

(稲生委員)

高校教員が中学に出向いて授業することは、一定の成果があった。高校との連携を全国大会で発表したら、大きな反響があり、小規模校の連携として注目された。伊藤校長がお話ししているように15年教育に本気で取り組んでいきたいと考えている。

(清野会長)

今から思うと、三川中もあった。阿賀津川中は地理的に近いため、交流しやすい一方、三川中は離れているため、壁がある感じかもしれない。いずれ三川中も参加するだろうと思っていたが、三川中も入れた中高連携という手もあったのではないかと思っている。

(齋藤委員)

英語の授業について詳しく教えて欲しい。

(稲生委員)

ブリッジというテキストを使用している、内容は文法を教えてもらっている。

(齋藤委員)

なぜ高校の先生が中学に行くのか。中学では教えられないことを高校でやるのか。どのような意図で行っているのか伺う。

(稲生委員)

町として、英語教育に力を入れていきたいというところ。高校の専門性を中学に取り入れるという意味である。管理規則にて、阿賀津川中学校の教育過程だけは特別と記載がある。

(清野会長)

子どもの将来に向けて英語は欠かせない。元々、津川中学校と高校の交換授業という形で交流があった。その枠を生かす形でやっていった経緯だ。

(遠藤委員)

阿賀町の子どもの英語の力を伸ばす必要があるのは確かだ。

(加藤委員)

回数が減っていったのはなぜか。

(稲生委員)

高校の英語の教員減が理由だ。1学級募集になり、高校教員がいない。やり

たいけどできないのが現状。

(遠藤委員)

連携を始めた時と比べて、高校の環境も変わった。連携教育をやるといえども、高校の状況を踏まえた連携をすべき。ずっとやっていたから英語という訳ではなく。

阿賀町さいこうプロジェクトを中学と合同でやる形で考えているのか。

(稲生委員)

検討している段階だ。

(齋藤指導主事)

スクール・ミッションについては、基本は12月に出された素案をベースに若干修正をしているものである。阿賀黎明高校は県立高校で唯一のコミュニティ・スクールであるから、これは外せない。「大人も子ども」という部分は、修正を加えたものを提出してもらった上で協議になるのではないか。

(伊藤校長)

学習意義についてはスクール・ポリシーになるかもしれない。スクール・ミッションは輩出したい人物像ではないか。

(清野会長)

生徒も教員も減っている中、ボート部はどのような活動をして成果をあげているのか伺う。

(事務局)

複数名教員を配置している。加えて外部講師を配置している。

(清野会長)

大変だろうが、頑張っていたきたい。

(稲生委員)

15年教育を受けてのスクール・ミッションと聞いたが、ずれているように感じる。保育園児の姿についても納得いかない。15年教育を見直さない限り、阿賀黎明高校がそこに位置づいているとは論が成り立たない。

(齋藤委員)

大事な観点かと思う。リンクされていなければいけない。15年教育に対するスクール・ミッションとスクール・ポリシーを作ったらいいのだろうか。それを受けて小中高の役割分担が自ずと決まってくるのではないか。

(遠藤教育長)

昨年度末に作成したところ。小中高の代表者の当事者が集まって作ったもの。当時の担当者がやってきたものが、違うことをしているのかと言われると、15年教育を策定しているのであって、そんなに簡単に換えられるものではない。論議された上で作られたのが前提であり、集まってきている人の個人の考えで作ったものではない。リンクしたものでないといけないというのは間違いはないが、どういふものがあるのかということ踏まえて作らないといけない。15年教育と違うから15年教育を作り直すというのは簡単にはできない。

(稲生委員)

落ちないところ。大前提である地域に密着した、阿賀町に高校を残すという考えで捉えていった時に、当事者ではないから分からないが、会議には1回顔を出して知らない間にできていた。

(遠藤教育長)

それは違う。この場ではふさわしくない話になっているため、一旦やめる。

エ S a G a S uプロジェクト (齋藤指導主事)

<資料に基づき、取組を説明>

プロジェクトの取組を教育系の全国サミットで発表させていただいた。広島や群馬等、県外から視察が相次いでいるところである。どの取り組みも先進的ということで注目いただいている。県議会でも進捗状況等について質問が出ている。国事業としては令和5年度までだが、他の地域にどう成果を波及させていくかである。遠隔授業においては、今年度も実験や実習などにも挑戦いただいた。ネットワーク校の2年生全員がオンライン交流を行う。探究学習の発表内容をSDGsの17のゴールと最も近いものを結び付け、同じゴールの人で集まって交流をする。2月に2回目を予定し、内容を充実させたい。10月17日には広島の生徒とも交流予定である。阿賀黎明高校での取組も先進モデルとして示されつつある。他の市町村を含めて紹介させていただきたい。

(加藤委員)

生徒の反応いかん。

(齋藤指導主事)

S a G a S u委員会にはネットワーク校の生徒会の生徒を中心に参加してもらっており、生徒間の会話が弾んでいる。自分たちのことを教えようしたり、相手の学校のことを知ろうとしたりしている。他県との生徒交流やプロジェクトの内容の発信、探究的な活動を合同で実施したい。探究的な活動では地域の民俗芸能を深く学習しようとするアイデアが出ており、専門家の指導をいただきながら取り組む予定である。

(猪俣委員)

6年以降、S a G a S uプロジェクトの連携校は増えていくのか。

(齋藤指導主事)

プロジェクトとしての生徒連携校は佐渡と阿賀で堅持する。佐渡と阿賀は距離が離れていることから、お互いにはない価値観に刺激を触れられている印象がある。

(猪俣委員)

近辺で知り合っている生徒もいる中で、近い地域の連携よりは距離的な制約がありながらも教育で繋がっていく方が魅力的だと個人的には感じた。阿賀黎明の魅力だと思うので、堅持して行ってほしい。

(齋藤指導主事)

後継事業があるかは分からない。採択された際に、国の事業が終わったから終わりではなく県事業に発展させていく形で検討していきたい。

(猪俣委員)

頼みの綱のような部分もある。よろしくお願ひしたい。

(齋藤指導主事)

人口減少が進む中で、再編に手をつけないのは現実的でないが、この事業を通じて小規模校の魅力化を進めていけるのであれば、それはそれで意義のあることだとは感じている。

オ パートナーズの報告 (齋藤委員)

地域学を担当している。昨年は4チーム、今年度は人数が少ないこともあり2チームで取り組んでいる。パートナーズの広報をした方がいいのではということもあり、広報あがに出させていただくのとニュースレターの年3回発行を目指している。あとは、文化祭のバザーで参加させていただく。